

【論文】

学校と地域の連携の展開と課題 ーコーディネーターの学習機会と協働関係ー 西村 彩恵*

The development and problem of School-Community Cooperation - The learning opportunities and collaborative relationships among the coordinators - NISHIMURA Sae

学校と地域の連携は、2006年の教育基本法改正により第13条において規定され、それを具体化した施策として学校支援地域本部事業が展開されている。現在は、「学校・家庭・地域の連携による教育支援活動促進事業」の1つとして継続的に取り組まれており、事業の中で学校と地域を繋ぐ役割を担う地域コーディネーターが活動を展開している。地域コーディネーターは、主に学校と地域に精通していると想定されるPTA役員経験者、退職教職員、地域住民組織等(自治会等)関係者などが担っており、各自培ってきた経験を活かして活動することが期待されている。

B県C市D中学校区の学校支援地域本部(以下、地域本部と略)では、本部事業開始から7年経過し、継続的に活動を推進している。コーディネーターは、月に1回活動をふり返るための話し合いだけでなく、共通のボランティア活動を通して協働関係を築いていた。そこで、本稿ではB県C市D中学校区のコーディネーターを対象に、実際の学校支援活動において、コーディネーターがどのような場で学びの機会を得ているかを考察した。その結果、コーディネーター間で経験値を共有し学び合っていたこと、学校内の活動以外で学んでいたことが明らかになった。

キーワード：地域コーディネーター、学校と地域の連携、学校支援、ボランティア、協働関係

I. はじめに

学校、家庭、地域の連携は、2006年の教育基本法改正により、第13条において「学校、家庭及び地域住民その他の関係者は、教育におけるそれぞれの役割と責任を自覚するとともに、相互の連携及び協力を努めるものとする」と規定された。それを具体化した施策の1つとして、文部科学省は、2008年度から2010年度まで「学校支援地域本部事業」(以下、本部事業と略)を実施した。本部事業では、学校、地域コーディネーター(以下、コーディネーターと略)、学校支援ボランティア(以下、ボランティアと略)、地域教育協議会で構成され、「地域住民をはじめとした学校支援ボランティアの活動をコーディネートするしくみを学校単位」でつくり、教員

の負担軽減、多様な教育活動の充実、地域の教育力の向上を目指している(梶野 2013, 125)。全国の各市町村の学校支援地域本部の設置数を見ると、事業開始の2008年は867であり、2010年に1005とピークを迎え、事業終了後は570と激減したが(2010年対比56.7%減)、2013年は619市町村で設置されており、微増している状況にある。現在は「学校・家庭・地域の連携による教育支援活動促進事業」の1つとして継続的に取り組まれている^①。

本部事業において、学校支援活動のコーディネーターを行うコーディネーターは、2013年度では約8,300人(1学校に平均1人、1本部に平均2人)で、学校と地域に精通していると想定されるPTA役員経験者、退職教職員、地域住民組

*越谷保育専門学校非常勤講師

織等(自治会等)関係者などが担っている^②。

このように、地域住民が培ってきた経験を活かして学校支援活動をコーディネートする機会が増えており、コーディネーターへの期待の高まりが見られる。その中で、高橋(2011)は、コーディネーターが実践の積み重ねによって成長する存在であり、学校側もコーディネーターやボランティアと共に成長しようとする発想が必要だと指摘している。そのため、コーディネーターが活動の中でどのように学び成長しているのかを検討することが重要であると考えられる。

B 県 C 市 D 中学校区の学校支援地域本部では、本部事業開始から 7 年経過し、継続的に活動を推進している。コーディネーターは、月に 1 回活動をふり返るための話し合いだけでなく、共通のボランティア活動を通して協働関係を築いていた。

そこで、本稿では B 県 C 市 D 中学校区のコーディネーターを対象に、実際の学校支援活動において、コーディネーターがどのような場で学びの機会を得ているかをやや詳細に考察する。

II. B 県 C 市の学校支援地域本部の概要とコーディネーターの取り組み

2-1. B 県 C 市学校支援地域本部の概要

B 県 C 市 D 中学校区の学校支援地域本部は、委託事業開始と同時に設立され、2011 年度以降も活動を継続し、現在 7 年目であり一貫して活動を推進している。1 中学校、3 小学校の計 4 校で本部事業を行っており、コーディネーターの配置数は計 5 名となっている^③。2013 年度の活動回数は計 147 回、ボランティアの参加者数は延べ 978 名である^④。また、委託事業終了後の 2011 年度からコーディネーターが自主的に企画した講座も展開しており、2013 年度の活動回数は計 78 回、ボランティアの参加者数は延べ 323 名となっている^⑤。

活動内容は、次の 3 つに大別される。第 1 は、読み聞かせ、家庭科授業補助(ミシン補助)、夏休み中の絵画・学習・書道支援、生活科授業補

助(兎の観察)等の学習支援、第 2 は、雅楽体験、職業体験、等の体験学習の支援、第 3 は図書整備等の環境整備の支援、である。いずれも、コーディネーターが学校からの要請を受け、ボランティアの選定、支援内容、教員との調整等の活動支援が行われている。なお、D 中学校区では、必要に応じてボランティアを融通しながら、各校での活動を円滑に進められるよう協力体制がつけられている。これらの活動に対して、コーディネーター間で情報を共有しており、月に一度各学校のコーディネーターが一同に集まり情報共有と学び合いの場として委員会を設けている。具体的には、各学校の活動状況の確認、ボランティアの必要人数の把握、学校側との調整について話し合わせ、主に進行状況の把握や手続き上の確認が行われており、年度毎にコーディネーター同士で相談しながら弾力的に実施している。また、活動後にボランティアや教員に向けてアンケートを実施する他、話し合いの中で活動について聞き取りを行ってふり返っている。

これらに共通する点は、活動の企画立案に基づく進行状況について検討されている点である。また、コーディネーター間でのふり返りの際も、募集や情報の伝達に比重が置かれており、活動を円滑に進めるための検討素材を重視したふり返りが行われている。

これらの効果については、①活動のスタンスがよりはっきりとイメージできるようになる、②ボランティアに活動の様子を聞くことで、ボランティア自身が活動の様子をふり返ることができる、という 2 点を挙げている。こうした場以外にも、各コーディネーターは、個別に連絡を取り合いながら、互いの活動について相談しながら進めている。

2-2. コーディネーターの活動経緯と地域での活動経験

コーディネーターは、30 代から 50 代の女性の 5 名(J さん、K さん、L さん、M さん、N さ

ん)が4校(D中学校、E小学校、F小学校、G小学校)をそれぞれ担当しており、コーディネーター歴は約2年から7年までと多様である。

コーディネーターは、主に地域本部の読み聞かせボランティアの活動や、読み聞かせボランティアが中心となって設立した地域団体「ゆい」に関わっている⁶⁾。この団体は、地域本部における地域づくりの一環として、読み聞かせの他、人形劇、手遊び、ブックトーク等を行っている。C市内の幼稚園、小学校等で実演するだけでなく、D中学校区外でも活動を展開している。それぞれ読み聞かせや人形劇などのボランティア活動を経験した後、コーディネーターには学校長や前任者からの依頼を受けて引き受けている。

Jさん(40代女性)は、D中学校のPTA役員を経験し、その後本部事業の開始当初からコーディネーターとして活動して7年目である。地域本部独自の自主企画講座を発案し、地域本部の運営など、中心的な役割を果たしている。その間に学校評議員を務め、また校長会に出席してコーディネーターの活動を紹介するなど精力的に活動を展開している。

Kさん(50代女性)は、E小学校の保護者であり、同小学校の読み聞かせボランティア活動に参加していた。校長と他校のコーディネーターからの依頼で引き受けてから、約4年が経過している。読み聞かせや人形劇をはじめ、他校のボランティア活動に参加するだけでなく、育成会役員など地域活動にも関わっている。

Lさん(40代女性)は、F小学校の保護者で、地域活動への参加経験はなかったが、D小学校の読み聞かせボランティア活動に参加したことを契機に、人形劇の活動にも関わっていくようになった。前任者からコーディネーター就任の要請を受け、約2年活動している。

Mさん(30代女性)は、地域での活動経験はなかったが、F小学校に子どもの入学を機に読み聞かせに興味を持ちボランティア活動に参加した。活動を通して次第に楽しみを持つようになり、前任者からコーディネーターを勧められ、

コーディネーター養成講座を受けながらLさんと共に約2年コーディネーターとして活動している。

Nさん(30代女性)は、G小学校のPTA役員を経験していたが、読み聞かせや人形劇の実演を通してその活動に関わるようになり、現在はその活動の運営にも積極的に関わっている。G小学校の前任のコーディネーターに依頼されて引き受けた。その後、コーディネーター養成講座を受け、次第にコーディネーターとしての活動に興味を持つようになった。Lさん、Mさんと同時期にコーディネーターに就任しており、約2年活動している。

このようにD中学校区のコーディネーターは、読み聞かせなどのボランティア活動や人形劇の活動などの地域活動を経験しており、コーディネーターの交代を経ながらも、地域本部の活動を継続している。

2-3. インタビューの概要と研究方法

本稿では、D中学校区のコーディネーター5名へのインタビュー記録を素材とする⁷⁾。インタビューは半構造化面接法を用い、コーディネーターに対して2014年2月21日、同8月4日、同8月19日、同10月31日に実施した。

その結果、経験を積み重ねてきたコーディネーターは、自分たちの活動をどのように進めてきたのかを経験の浅いコーディネーターに伝えている様子が伺えた。また、担当になって間もないコーディネーターは、学校、地域、ボランティアとの関わりを模索しながら活動しており、コーディネーター間のやりとりから、自身の活動中の動きや対応方法などを学んでいる様子が垣間見られた。また、互いの状況が変化する中で、今後の活動を模索する姿が見られた。

次章では、インタビューで得られた発言に基づき、コーディネーター同士の学び合いを取り上げ、それぞれの意識をやや詳細に整理する。なお、引用する発言については斜体で示すこととする。

Ⅲ. コーディネーターの意識の検討

3-1. コーディネーターの経験から学ぶ—学校と地域を知るきっかけを探す—

コーディネーターは、学校支援活動を行う中で、学校と地域との関係について、次のように述べている。

子どもがお友達の家に遊びに行きたいんだけど、どこに住んでいるのかが分からないとか。遊んで来てお礼の電話をしようと思っても、電話番号が分からない。そういう(親と子が結びつかない)状況だからね。(Jさん・インタビュー記録 2014.2.21)

幼稚園の行事って割と(ボランティア活動など)子どもへの教育活動に参加するお父さん、お母さんは多いですが、小学校に来ると途端に減るんですね。うちは(自分の子どもが)幼稚園と小学校の両方にいるので、子どもに対しての大人の関心の温度差が凄くあると最近感じますね。地域がそういう感じなので尚更こういう活動が凄くやりづらいけど、本当大事な事業だと思います。(Mさん・インタビュー記録 2014.2.21)

このように子ども同士や保護者同士が顔の見える関係ではないことに気づいており、コーディネーターそれぞれが共通の課題として認識していた。一方で、コーディネーター自身が、これまで学校と地域との関係に目を向けていなかったことに気づいていく。コーディネーターにとっては、担当校でのボランティア活動や、学校を取り巻く状況を具体的に理解するために、他のコーディネーター、ボランティア、教員との関係を作ること自体が課題となってくるのである。

その点について、Kさんはこれまでの活動を振り返って次のように語っている。

前の校長の時に何をしたら良いのか分からな

いから、ちょっとしたことでも良いから、直接会いに行きました。そうすると、校長先生と喋っている中にヒントがあって、それを自分で膨らませてたものを提案しましたね。すぐに繋がらなくても、学校に行って何か(できることを)を見つけようと思いましたね。自分としては提案しながらなるべく学校の中に入れるようにしながら、3年目はやっていました(インタビュー記録 2014.2.21)

私は当初ボランティアとして学校に関わったんですね。コーディネーターをやるようになって、(児童に対してボランティアの熱意が強過ぎる場面で)「子どもに寄り添って下さい」となかなか言えなかった…一声掛けられるようになったのは、3年間の経験の中なのかな。自分の子どもを見るだけの学校ではなく、先生も違った角度で見ることができるような経験を沢山の人のしてもらえる活動が学校の中で増えていけばと思うようになり…自分がボランティアをやった活動も踏まえながら、今のコーディネーターの活動もやっていければ良いのかなと思っていますね。(Kさん・インタビュー記録 2014.2.21)

このようにKさん自身、ボランティア活動で学校と関わりを持っていたが、当初コーディネーターの立場になり、ボランティアの児童への教育的な関わり方について気になることがあっても、伝えきれない部分があったと振り返っている。

その後、活動を積み重ねる中で、自分の子どもだけではなく、学校の状況自体をボランティアや地域にも理解してもらえるような働きかけが必要であることを認識できるようになったことが伺える。その結果として、Kさん自身がその役割を担えるようになってきたと実感するようになったと考えられる。

また、このような認識を持つように至るまでには、学校との接点を自分が関わっていたボラ

ンティア活動に留めることなく、学校が求めているものが何であるのか、学校と地域が協力できる活動がないか、日々学校に足を運ぶことで見出そうと努力してきたのである。

こうして積み重ねてきた経験を、Kさんは委員会等で会った際にNさんに伝え、それを受けてNさん自身もまた担当する学校や地域を知るために何ができるのかを模索し始めていく。

Nさんは、活動当初の状況をふり返って次のように述べている。

(Kさんから自分なりに)用事を作って(学校に)行けば良いと言われました…PTA役員を1年やりましたが、(それでも)最初は学校に行くこと自体が、学校の授業参観しか機会があったので難しかったですね。地道に先生たちとの関係を築き上げないといけないので、自分も遠慮して行かないと自分も行けなくなる(ことが分かって)…(コーディネーターになって)約1年経って漸く楽しくなってきました。(Nさん・インタビュー記録 2014.2.21)

私は(コーディネーターを)やるなら自分の学校区に行けば良いと思って、学校の周りを歩いて朝に安全指導の先生と立ち話をするようにしました。安全パトロールの意味を含めて…実際に学校に行くにはどんな道があるのか普段通っている道以外を見てたり、通っている子どもに挨拶をすとか、あの子いつも遅れて来ていて大丈夫かなとか。学校を見る目も、自分の中で意識が高まりましたね。(Nさん・インタビュー記録 2014.2.21)

このように、Kさんから、学校に足を運ぶことで学校との関わりを持ち、その中から活動できそうなことを模索することを伝えられていた。活動して間もないNさんにとって、当初自分の子どもの様子を知るためではなく、学校や地域のための足を運ぶということに躊躇いを感じていたのである。

そのため、まずはNさん自身が日常生活の中で学校やその通学路を知ること、児童や教員の様子を知るために児童や教員に声を掛け、学校や地域を知るためのきっかけを探していたことが分かる。

また、Mさんも活動当初の状況について、次のように語っている。

どうしたら良いのか分からないから学校に通い詰めていくというような感じで…分からないままボランティアとして参加すると目的が違うということを再確認しながらやらなければと最近思います。良い先輩たちの動きを見てこういう風にボランティアさんを仲介すれば良いのかなと学びながらやる過程なので…見て学ぶ人がいないと進んでいかない。(Mさん・インタビュー記録 2014.2.21)

自分の子を見に行くのではなく、子どもたちの学校の生活の中に入っていくお手伝いするという姿勢に変わった気がしますね。自分の子を探していたけど、このクラスのどんな雰囲気ってどうだったかなとか、上下関係とか、違う学年で交流があるんだなと学校の全体の雰囲気を見るようになった気がします。(インタビュー記録 2014.2.21)

Mさん自身、学校や地域について知らず、自分の子どもの姿を見たいという気持ちから、当初ボランティア活動に参加していた。コーディネーターになってからは、ボランティアとして参加している保護者や地域住民はもちろんのこと、クラスの様子や他の学年の様子などにも関心を持つようになり、学校全体の状況を知るための活動に変化したことを認識するようになっていった。また、活動経験のあるコーディネーターの動きを確認しながら、自分の役割を学びとろうとしていたことが伺える。

コーディネーターは、クラスや学校全体、学校を取り巻く地域の状況に関心を持つように変

化していた。学校や地域を知り、関わっていくためのきっかけを、他のコーディネーターとのやりとりや自分の日常生活、実際のボランティア活動の中で見出そうと努力を重ねている姿が見られた。

3-2. コーディネーターの協働関係の変化への対応

Jさんは、「私が何かに強い拘りがあって道を踏み外しそうになった時にも、周りにコーディネーターがいることで真っ直ぐ進むことができると思う…そこを思い出させてくれるメンバーなので、今は助かっていますね」(インタビュー記録 2014.6.30)と述べており、コーディネーター同士で委員会や共通のボランティア活動を通じて話すことに対して、自分の考えを再考できる機会として捉えており、コーディネーターの活動の方向性を確認している。

また、Lさんも同様に他のコーディネーターが参加している共通のボランティア活動の中でも相談しており、次のように語っている。

コーディネーターやボランティア活動、「ゆい」も1週間に1、2度あるので、何でも聞いてくれて厳しいことを言ってもフォローしてくれる人たちがいます…小学校だとE小、F小、G小など色々な学校のコーディネーターやボランティアが入っているので、(学校の状況が)よく分かるんです…「それ面白いね、うちでも取り入れてみようかな」とお互いに(言い合っ)。 (Lさん・インタビュー記録 2014.10.31)

Lさんの発言にも見られるように、コーディネーターが関わる共通のボランティア活動を通じて、互いの学校の状況を把握しており、活動の合間に自然に自分の学校で取り入れられそうな活動や取り組みを情報交換しており、良好な関係を築いていたことが伺える。また、コーディネーターとしての活動を相談しながら、自分

自身がどのように活動を進めれば良いのかを考え相談し合い、悩みや不安を解消してきたのである。

一方で、Jさんは、各自コーディネーターとして担当校での活動を積み重ねてきている中で、どのようにコーディネーター間の連携を図っていくのかということ意識しながら活動を続けており、次のように述べている。

年数を重ねると段々と学校の様子や自分の動きが分かってきて、今年は月に1回皆集まって各校の活動がどういう風に進んでいるか説明をしようということになったんですが…今皆が忙しく、なかなか他への配慮も出来なくなってくる時こそ集まらなければならないということが学習ですね。それぞれが自立した形でやっていますけれども、そこをどうすり合わせていくのが今年の課題だと見えてきているところです。(Jさん・インタビュー記録 2014.6.30)

D中学校区では、年度毎に各コーディネーターと相談しながら弾力的に委員会を実施しているが、各担当校でのコーディネーターの活動が徐々に定着する中で、他校と連携しながら進めるためには、これまで構築してきた関係を変化させていかなければならないことを実感している。その点について、Lさんは次のように述べている。

他のコーディネーターと話しても、自分の学校に持ち帰っても通用しないこともあり、学校ごとの対応になってしまう…(それぞれ学校の)カラーがあるので、自分の学校(の状況)と全然違うので、「4校でやる意味はどこにあるんだろう」と考えることもありますね。(Lさん・インタビュー記録 2014.10.31)

このように、Lさんはボランティアを融通する以外にも、D中学校区として4校が活動して

いく意味が見出すことが必要であると考えているのである。同じ学区内でも、それぞれの学校や地域事情や異なり、それらをコーディネーター間で確認できるようにするために模索していることが伺える。

これらの発言からは、活動が徐々に定着し積み重ねている半面、コーディネーターの間で活動状況に対する認識をどのように共有していくのかが課題になっている。それぞれがコーディネーター同士の協働関係に対する課題を意識しているだけでなく、それ自体を自分たちの学習活動の1つとして考えており、活動方法や進め方に対して再考すること自体が、今後の更なる展開を見出すための第一歩となると考えられる。

IV. 考察とまとめ

前章の分析から得られた考察を、以下に論じる。

第1は、経験値の共有と学び合いである。コーディネーターは、各自ボランティア経験を有しているため、学校との関わりを通して教員やボランティアと接点を持っていた。しかし、コーディネーターとして職務を担う過程で、立場の変化に伴う状況の変化を目の当たりにすることになる。そのため、KさんやMさんの発言に見られたように、ボランティアとして関わっていた際には自身の子どもを見ることに傾注していた意識が、コーディネーターの立場ではより広い視野を持つことの必要性を実感することで変化していった。

また、この経験を他のコーディネーターと話し合い共有することで、Nさんの力量形成の契機へと発展する。Nさんは、担当する学校や地域を知るための活動を模索し、日常生活の中で学校や通学路を知ることや児童や教員の様子を知るために積極的に声をかけるという日々の地道な活動を行っていくことを考え、実行する。

このように、コーディネーター間で話し合われたを共有し学び合うことで、各自が担当する学校における実践のために必要な学校や地域を

知るための努力を積み重ねていったのである。

第2は、学校内の活動以外での学びである。Lさんの発言に見られるように、「ゆい」のボランティア活動の中でコーディネーター同士が共にボランティア活動をする過程で、様々な情報交換をしている。彼女らは、コーディネーターとしての職務を担う時だけではなく、共通に所属するボランティア活動の中でも悩みや疑問を話し合い、他校の状況の一つひとつ確認しながら各自の担当校での実践へと活かそうとする姿勢が垣間見える。公式に位置づけられた委員会の中だけではなく、彼女ら自身が関わるボランティア活動で集まる機会も利用することで、より多くの学びの機会を設けており、それぞれの実践知を共有することで悩みや不安もまた解消しながら新たな活動を模索していったのである。

他方、Jさん、Lさんの発言に見られたように、コーディネーター間で活動状況に対する認識をどのように共有していくのかという点に課題が示されている。上述してきたように、各学校で行われている実践知をコーディネーター間で共有しているものの、それらがD中学校区全体の活動へと十分には還元しきれているわけではなく、各学校の実践に留まっている可能性があると考えられる。

本部事業が、中学校区単位で営まれていることを勘案すれば、これらの点をより精査していくことが今後の課題であると言える。

謝辞

本稿の作成にあたり、資料提供のご協力とインタビュー調査にご協力頂いた学校長、地域コーディネーターの方々に、ここに記して感謝申し上げます。

註

- (1)文部科学省・厚生労働省『「学校・家庭・地域の連携による教育支援活動促進事業」実施状況』(2013)を参照。
- (2)文部科学省初等中等教育局参事官付『行政説明「コミ

学校と地域の連携の展開と課題

ユニティ・スクールの今後の展開』、2014、6頁。
尚、教育活動サポーターは約27,000人(1学校あたり平均3人、1本部あたり平均8人)、教育活動推進員は約30,000人(同3人、同9人)、その他無償ボランティアは約115万人(同133人、同326人)である。

- (3)コーディネーターが交代する可能性があり、交代後の円滑なコーディネートが行えるよう、2014年4月時点で新たに2名が加わり業務の引継ぎを実施している。
- (4)B県C市学校支援地域本部「平成25年度市民活動参画支援事業活動計画」(2013)参照。
- (5)B県C市学校支援地域本部「D中学校区活動総括表」(2013)参照。D中学校区外の学校への読み聞かせ、人形劇講演、ランニングクラブ、学校支援地域本部企画の講座を開催している。
- (6)なお、学校支援活動のボランティア以外にも、D中学校区外の保護者も参加している。
- (7)インタビュー記録は、匿名性を守るためアルファベットを用いて表記する。インタビュー内容は、再現性を保障するため全てICレコーダーに録音し、逐語的に書き起こし内容確認も行った。本稿でインタビュー記録を引用する場合は、次の凡例に基づいている。凡例：()は筆者による補足説明。発言中の「…」は前後の発言の省略。引用後の()はデータの出所、記録した年月日。尚、発言は文意を損ねない程度の修正を加えた上で引用している。

科学省・厚生労働省

文部科学省初等中等教育局参事官付(2014)『行政説明
「コミュニティ・スクールの今後の展開」』文部科学省初等中等教育局

文献

- 梶野光信 2013「第12章 ボランティアのコーディネーション」『ボランティア活動をデザインする』田中雅文・廣瀬隆人(編) 東京：学文社
- 高橋興 2011『学校支援地域本部をつくる—学校と地域による新たな協働関係』 東京：ぎょうせい
- B県C市学校支援地域本部 2013「平成25年度市民活動参画支援事業活動計画」B県C市学校支援地域本部
- B県C市学校支援地域本部 2013「D中学校区活動総括表」B県C市学校支援地域本部
- 文部科学省・厚生労働省 2013「『学校・家庭・地域の連携による教育支援活動促進事業』実施状況」文部